

シャーロック・ホームズ — 世紀末ロンドンの神話的ヒーロー —

宮地 信弘

Sherlock Holmes: A Mythical Hero in Fin-de-Siècle London

Nobuhiro MIYACHI

序

西欧諸国による植民地獲得競争が一段と激化してくる19世紀後期、イギリスでは1887年ヴィクトリア女王即位50周年を祝う式典が盛大に催された。同じ年に、後々まで一つのアーキタイプとしてさまざまなメディアに君臨することになる一人の名探偵とその記録作者が登場する。シャーロック・ホームズとドクター・ワトソンである。世紀末のどん詰まりに向かって内外にいろいろな問題が浮かび上がってくる中、¹⁾ シャーロック・ホームズは、出だしこそ好調ではなかったが、あたかも世紀末の社会不安を調伏するヒーローとして、階級を問わず、イギリスの民衆からもてはやされることになる。架空の探偵にすぎないホームズを実在の人物と思い込み、「ベイカー・ストリート221番地B」(“No. 221 B, Baker Street”)まで事件解決を依頼に来る者が後を絶たなかったというのはよく知られた話である。

Ian Ousby は正典60編に及ぶシャーロック・ホームズの活躍を次の3期に分けて分析している。²⁾

第一期：『緋色の研究』(*A Study in Scarlet*, 1887) と『四つの署名』(*The Sign of Four*, 1890)、すなわちホームズ・サーガにおける最初の長編2編の時期。ドイルがホームズを創出する際にモデルとした、E. A. Poeの素人探偵デュパンのイメージが濃厚で、事件そのものよりもホームズの人物造形と、彼の推理哲学の開陳に重点が置かれる時期。

第二期：『冒険』(*The Adventures*, 1892) と『思い出』(*The Memoirs*, 1894) におけるホームズ活躍の時期。1891年から中流階級向けの雑誌*The Strand*誌に連載が始まってホームズの人気が急激に伸び、ホームズの神話化がすすみ、そのイメージをシドニー・パジェットの忘れがたい挿絵とともに定着させる時期。ホームズ物語の中でも最上の出来のものが多い。

第三期：ホームズ復活後の長編『バスカヴィル家の犬』(*The Hound of the Baskervilles*, 1901) から『帰還』(*The Return*, 1904)、『最後の挨拶』(*His Last Bow*, 1917) を経て最後の『事件簿』(*The Case-Book*, 1927) までの時期。ホームズが次第に矮小化し、神話的なヒーローから良識ある英国紳士に凋落していく時期で、作品に新味を出そうとしながらも、以前のアイデアを再利用するといったことが目立つようになる。

この小論ではシャーロック・ホームズとはいかなるタイプのヒーローであったか、そのあたりを主に初期の作品(Ousbyの言う第一期及び第二期の作品)を中心に考えてみたい。

〈血の析出〉

名探偵ホームズが我々の前に始めて姿を現すのは、下宿を探しているワトソンが友人の紹介で彼と出会う場面においてである。下宿の同居人となるシャーロック・ホームズに会いにワトソンが友人とともに病院の化学実験室に入っていくと、ホームズはアルキメデスのように“*I've found it!*”を大声で連発する。「血色素のみに反応して沈殿する試薬」(“*re-agent which is precipitated by haemoglobin, and by nothing else*”)の調査にやっと成功したのである。その嬉しさのあまり、彼は思わず、初対面のワトソンの袖を引いて、その成果を再現してみせる。自分の指に針を刺して、ピペットでごく少量の血を吸い上げ、1リットルの水の中に溶かし、そして件の試薬くだんを加える。

... ‘Now, I add this small quantity of blood to a litre of water. You perceive that the resulting mixture has the appearance of pure water. The proportion of blood cannot be more than one in a million. I have no doubt, however, that we shall be able to obtain the characteristic reaction.’ As he [i. e. Sherlock Holmes] spoke, he threw into the vessel a few white crystals, and then added some drops of a transparent fluid. In an instant the contents assumed a dull mahogany colour, and a brownish dust was precipitated to the bottom of the glass jar. (*A Study in Scarlet*)³⁾

透明な溶液はたちまち「鈍いマホガニー色」を帯び、「褐色めいた澱」が沈殿して、再現は見事に成功する。ホームズ最初の偉業であり、読者にその超人性を強く印象づける場面である。再現成功に気をよくしたホームズは「新しいおもちゃを手にした子供」のように喜び、「癒瘡木脂法」(“*guaiacum test*”)や「顕微鏡検出法」(“*microscopic examination*”)といったそれまでの血の検出法がいかに不完全であったかを眼を輝かせて得々と説明した後で、「もっと早くこの方法が見つかったら、いま堂々と地上を歩いている人間の中には、とっくの昔に罪の代償を払わされていた者が何百人といえるはずだ」と言い、その何百という犯罪者達を、最近の者から数え上げていく。いわく、「フランクフルトのフォン・ビショッフ」(“*Von Bischoff at Frankfort*”),「ブラッドフォードのメイソン」(“*Mason of Bradford*”),「悪名高いマラー」(“*notorious Muller*”),「モンペリエのルフェーブル」(“*Lefevre of Montpellier*”),「ニューオーリーズのサムソン」(“*Samson of New Orleans*”)等々。このように犯罪者を列挙していくホームズを見て友人は、君はまるで「歩く犯罪暦」(“*a walking calendar of crimes*”)だと評する。

以上が、我々が最初に眼にするシャーロック・ホームズであるが、ここにはホームズに特徴的な身振りをいくつか読み取ることができる。病院の化学実験室で実験に没頭しているとはいえ彼も彼は医学生ではない。ホームズの専門分野が何なのか誰も知らず、友人に「植物性アルカロイド」を嗅がせたり、死体を叩いて打撲の跡がどれほど現れるかといった奇妙な実験を行っては周囲の者を不審がらせている。どうやら彼はそれまでの医学や化学とは違ったある特別な知識を求めているらしい。中でも彼が特に関心を抱いているのが血の析出なのである。であればこそ、新しい確実な血の検出法 — それを彼は「シャーロック・ホームズ法」と名付ける — の発見に子供のように喜ぶのも納得がいく。血に対するオブセッション。それこそがシャーロッ

ク・ホームズを規定する最大の特徴である。すなわち、彼は殺人の痕跡の発見とその再現にこそ興味と生き甲斐を見いだすエキセントリックな人物なのである。

そのように血の析出に憑かれたホームズであれば、彼が見る世界もまた緋色すなわち血の色に彩られているのは当然であろう。『緋色の研究』において、シャーロック・ホームズの超人性を印象づける偉業の一つに“RACHE”という血文字の解釈がある。死体のある部屋の壁に“RACHE”という血で書かれた文字が残されているのをホームズがを見つけ、これをどう思いますかとスコットランド・ヤードのグレグスン警部に尋ねる。警部は常識的に（常識的であることが、ホームズから見れば無能に映るのだが）“Rachel”という女性名を途中まで書いてこと切れたのだと答える。大方の読者もそう考えるにちがいない。その点ではグレグスン警部の無能ぶりを笑うことはできないのだが、ホームズはこれを「復讐」を意味するドイツ語だと解釈する。なぜドイツ語だとわかったのだろうか？多くの可能性の中からどうして「復讐」という意味に確定できたのであろうか？そこが彼のスーパーヒーローたる所以なのだが、ホームズは常人とはちがって、犯罪という視点から人生を眺めているからである。彼は全ての現象を犯罪との関連においてとらえ、解釈しているのである。人生に対する犯罪学的な見方に染まった彼の目には、人生は退屈な無色の生地に犯罪という緋色の糸で織りあげられた、解釈すべき一つのテキストとしてしか映らない。美しい地方の自然も女性達の情熱もホームズの世界観を織る糸とはならない。「人生という無色の糸には殺人という緋色の糸が混じり込んでいる」(“There’s the scarlet thread of murder running through the colourless skein of life.”)⁴⁾とはホームズの名セリフだが、この言説は、世界を殺人の織物＝テキストと見るホームズの認識構造を見事に言い表している。人並みはずれた知識、鍛えられた観察力、そして推理の才能に恵まれたホームズにとって、人生は緋色に染まった記号の集積体としてのテキストなのである。シービオクはシャーロック・ホームズとアメリカ19世紀の記号論者パース(C.S. Peirce)を比較して、その類似性を指摘しているが⁵⁾、ホームズはまさに19世紀の並外れた記号論者であり、彼の前では人物も世界もすべて記号を含んだテキストと化すのである。

そのテキストと化した世界を彼は、あたかもフラスコの中の変化を見つめるように、一種超然とした視座から眺め、そして読み解いていく。たとえば、窓という視座。それはホームズのカリスマ性を保証する俯瞰の視点でもあるのだが、ホームズがワトソンとともに二階の下宿の窓から「大なる汚水溜め」(“that great cesspool”)であるロンドンの街を見下ろすという構図は物語の至るところに現れる。最もクラブ嫌いの者たちのクラブであるディオゲネス・クラブの張り出し窓に座ってホームズが兄のマイクロフトと観察眼をきそう場面で、マイクロフトは「人間を研究しようとするものにとって窓は最適の場所だ」(“To anyone who wishes to study mankind this is the spot”)⁶⁾と言う。また、ある時ホームズはワトソン相手にロンドン上空を飛行し、そこから人間世界を見下ろすという夢想を語る。

‘My dear fellow’, said Sherlock Holmes, as we sat on either side of the fire in his lodgings at Baker Street, ‘life is infinitely stranger than anything which the mind of man could invent. We would not dare to conceive the things which are really mere commonplaces of existence. If we could fly out of that window and in hand, hover over this great city, gently remove the roofs, and peep in at the queer things which are going on, the strange coincidences, the plannings, the cross-purposes, the wonderful chains of

events, working through generations, and leading to the most *outré* results, it would make all fiction with its conventionalities and foreseen conclusions most stale and unprofitable.' ("A Case of Identity")⁷⁾

空中の高い視座から下界を見下ろすとき、人生は「人間の理性や想像力が及びもつかない不可思議千万なもの」("infinitely stranger than anything which the mind of man could invent")として彼の興味をそそる。しかし、他方で人生は彼にとって退屈きわまりないもの、平凡この上ないものであり、そのアンニュイを嗅ぐことも少なくない。⁸⁾ だからこそそれから逃れるためにモルヒネを常用していたりもするわけであるが、「平凡この上ない」人生を「不可思議千万な」人生に一変させるのが彼の犯罪学的な見方なのである。平凡で退屈な人生もひとたび犯罪というフィルターを通して眺めると、きわめて面白い「不思議な偶然」("the strange coincidences")が数世代にもわたって作用しあい、「異常な」("outré")結果に収束する人生模様が浮かび上がってくるからである。ホームズはヴィクトリア朝の魔都ロンドンを興味尽きぬ犯罪の都市と見ているのである。「もし窓から飛び出して、この大都市の上空を漂い、こっそり屋根を剥いで、中を覗いてみれば」と夢想するとき、近代都市ロンドンに犇めく平凡な人生の背後に犯罪を読み取ろうとするホームズの犯罪学的な視線を意識せずにはおれないだろう。「探偵」を意味する英語 "detective" は語源的には「屋根を剥ぐ者」という意味であり、⁹⁾ この夢想はまさに犯罪中毒者のホームズにこそふさわしい夢想とすることができる。

もちろんホームズはただ眺めるだけでなく、その高い視点から世紀末のロンドンというテクストを読み解いていく存在でもある。むしろ彼の最大の関心はその解読作業にあると言ってよい。あたかも世界は彼に解読されるのを待っているかのように、彼はあらゆるものを読み解いていく。足跡、爪、袖口、靴底の減り具合、表情、筆跡、紙質、土、タバコの灰、パイプ、入れ墨の構図、自転車のタイヤの跡等々、彼はすべてを読む(彼には『足跡の研究』や『各種タバコの灰の鑑別について』といったマニアックな論文がある)。普通の人間が見逃す細部を読み、そこに意味のつながりを見出して関連づけていきながら彼が例証しているのは、この世界は解読可能な世界だということ、そして世界の秩序は特別の知を駆使して解読していく一人の人間によって守られているということである。彼は探偵である以上、自ら能動的に行動して犯人を捕らえるのは当然のことだが、時としてただ依頼人の話を聞くだけの場合も少なくない。依頼人の目には不連続で不可解な事件と映る現象がホームズの視点から読み直すとは意味の現象として一貫性を帯びてくる。このとき彼はすべてを見通す神にも似た、世界の解読者として世紀末のロンドンに君臨していることを印象づけることになる。

また、こうした上から見下ろすという俯瞰の視座に立つとき、この世は血を流す犯罪が行われる一種の劇場としてホームズの目には映ることにもなる。¹⁰⁾ ホームズ物語には至るところに劇の比喩やイメージが何気なく使われるが、それは世界に対するホームズの劇場的認識を端的に示すものであろう。劇のイメージは必ずしも突出したイメージとはなっていないが、ホームズ物語の言説の中にあまねく溶け込んでおり、その分だけ日常的に彼の認識様式を規定していると言することができる。

... he suddenly announced his intention of setting out for the scene of the drama, ...
("Silver Blaze")¹¹⁾

... the numerous cases which my companion's singular gifts have made me the listener to, and eventually the actor in some strange drama,... ("The Yellow Face")¹²⁾

「劇」(play)とはまた、そこに介入していくホームズからすれば、一つの「遊び」(play)でもある。世界を舞台に繰り広げられる犯罪という劇はホームズにとっては、自らの推理能力を満足させることだけを唯一の目的とした無償の遊戯空間でもあるのだ。ホームズのトリックスターとしての軽やかさはそこから生じるものであろう。ときとしてホームズは劇中人物として探偵の役を演ずるだけでなく、演出家としてワトソンや警部を観客に見立てて意識的に犯罪解決という劇を演出することもある。

Lestrade and I sat silent for a moment, and then, with a spontaneous impulse, we both broke out clapping, as at the well-wrought crisis of a play. A flush of colour sprang to Holmes's pale cheeks, and he bowed to us like the master dramatist who receives the homage of his audience. ("Six Napoleons")¹³⁾

そのようなとき現実世界は彼が想定した通りの成りゆきを辿り、予定調和に向かって収束する「神聖喜劇」(divine comedy)といった趣きを呈する。役者にして演出家。彼の劇場的認識がそれを可能にする。エリザベス朝以来の「世界劇場」(theatrum mundi)のトポスはホームズの世界認識の基本的枠組みでもあるのだ。

ホームズが道楽で行う化学実験もそのような認識様式と決して無縁ではあるまい。彼は、前に引いた「人生という無色の糸枷」云々に続けて「そして我々の仕事はその緋色の糸を解きほぐして、分離し、一つ残らず明るみに出すことだ」("and our duty is to unravel it, and isolate it, and expose every inch of it.")と言う。このホームズの言説は、化学実験室で血を析出するときの一連の過程(分離―結晶化)を連想させはしないだろうか。眼に見えない形でフラスコ内に溶け込んだごく微量の血を新しい試薬によって分離し析出して見せたように、彼は世界というテキストに見えない形で紛れ込んだ緋色の糸を明るみに出して行くのだが、この二つはきわめて類比的な行為で、化学実験に没頭するホームズの身振り¹⁴⁾は犯罪捜査に没頭するときのホームズの身振りにそのまま重なっていくはずである。すなわち化学実験は殺人を分離し、理知の明るみに引き出し、犯人を特定する探偵行為の原・身振りなのである。そしてホームズにとって実験室のフラスコは、いわば、神の如き視点から眺める社会のマイクロコスモスであり、犯罪の生成・発展・変化を再現するマイクロな世界劇場なのである。世界のテキスト化、世界劇場のトポス、そして次節で述べる因果律的思考、この三題めいた枠組みこそが、名探偵ホームズが世界を眺めるときの基本的認識構造と考えていいであろう。

<因果律の鎖>

19世紀の科学の多くは過去の再現というパトスにとらわれている。¹⁵⁾ フランスの博物学者・解剖学者 Cuvier は化石の研究を通して先史時代の動物の解剖学的構造を再構築し、その比較解剖学が19世紀の進化論を支えることになった(皮肉なことに、彼自身は反進化論者であったが)。T. H. Huxley は講義用の一本のチョークから古代の地質地図を再現できると説いた。

C. Darwin の進化論は言うに及ばず、博物学、地質学、鉱物学、人類学、遺伝学、骨相学、観相術など、19世紀に発展した科学は「現在」に残された痕跡から隠された「過去」を読みとり、その全体を実証主義的に再現することに向かう。シャーロック・ホームズの言う「推理学」(“the science of deduction”)¹⁶⁾もそうした19世紀的知のありようの中に位置づけることができる。死体あるいは犯罪という結果がまず現れ、犯人の残したいくつかの痕跡から殺害方法の過程を再構築し、そして犯人という隠された原因をつきとめる、あるいは観相術に基づいて人物の外見から、その内面に潜む犯罪者の性格を読み取る、¹⁷⁾ こうした一連の再現行為＝演繹(“deduction”)は本質においてキュヴィエの方法と何ら変わるところはない。Ousby は「ホームズは当時の読者にはキュヴィエやダーウィンやハックスリーの方法の後継者と映ったことだろう」¹⁸⁾と言う。ホームズ自身、第2作目の『四つの署名』で、ワトソンが前回の事件をまとめた本(すなわち、『緋色の研究』)¹⁹⁾をロマンティックな要素で色づけしていると批判し、唯一語るに値するのは「結果から原因に至る興味深い分析的推理」(“the curious analytical reasoning from effects to causes”)のみだと言い、さらに「探偵術とは厳正科学であるし、そうあるべきなのだ」(“Detection is, or ought to be, an exact science”)と説いて、推理の学を同時代の科学の領域に位置づけようとする。冒頭に引いた化学実験の場面はホームズのエキセントリックな性格とともに、彼の厳密な実証主義的態度を暗示するメタフォルカルな身振りでもあったのである。

ホームズは結果として現れたものには必ず原因があり、その原因は、厳正な科学的方法によって化学物質のように析出可能だという信念を抱いている。そこには因果律に対する絶対的な信頼がある。それは、言い換えれば、すべての謎は合理の内に捉え得るという信念である。すなわちホームズは徹底した合理主義者なのであり、したがって、彼には超自然というものは存在しない、あるいは超自然は合理的な推理が通用しないがゆえに、彼の扱う対象の範囲外ということになる。神秘というものはただ原因が隠されているから不可思議に見えるだけのことであって、その原因を知れば、実に他愛のないものでしかないことをホームズは知悉している。超自然的に見える怪奇現象はそうした彼の前では雲散霧消し、その結果、実に白けた現実のみすばらしさをさらけ出すことになる。たとえば、人々を震え上がらせた伝説の魔犬は、何のことはない、蛍光塗料を塗ただけのただの犬にすぎない(『バスカヴィル家の犬』)ことが彼の手で判明するし、赤ん坊の血を啜る吸血鬼事件も結局は子供の傷口から毒を吸い取る時に血が口の周りについたというだけのもの(「サセックスの吸血鬼」)であることをホームズの科学主義的な推理はたやすく暴いていく。一見すれば何の関連性もない細部の事実を繋ぎ合わせて、全体を明白な因果律の関連性の領域に引きずり出していくのが記号論者シャーロック・ホームズの離れ業(tour de force)だったのである。

ホームズの因果律への信頼は何よりも鎖の連結というイメージで表象される。ホームズもワトソンも事件解決後その事件を振り返り、その解決を原因と結果という因果律の連鎖的なつながりとして捉える。

‘You reasoned it out beautifully,’ I [i.e. Watson] exclaimed in unfeigned admiration. ‘It is so long a chain, and yet every link rings true.’ (“The Red-Headed League”)²⁰⁾

‘It was the first link in my chain of reasoning....’ (“Silver Blaze”)²¹⁾

‘Only now, at the end of nearly ten years, am I allowed to supply those missing links which make up the whole remarkable chain.’ (“The Empty House”)²³⁾

これはいかにも合理主義者にふさわしい比喻である。ホームズにとってはミッシング・リンクなどというものは存在せず、いずれの犯罪も、たとえいかに不可解に見えようともジグソー・パズルのように必ず最後の1ピースまできちんと本来の場所におさまり、因果律という円環の中に閉ざされて、大団円を迎えなければならないのである。

ホームズは「生命の書」(‘The Book of Life’)というなにやら大仰な題を付した新聞への投稿記事で、中世以来の「存在の大きい鎖」(the great chain of being)という伝統的観念を援用して、自らの推理哲学の本質的性格を述べる。「一粒の水滴から」とホームズは書き出す。

a logician could infer the possibility of an Atlantic or a Niagara without having seen or heard of one or the other. So all life is a great chain, the nature of which is known whenever we are shown a single link of it. Like all other arts, the Science of Deduction and Analysis is one which can only be acquired by long and patient study, nor is life long enough to allow any mortal to attain the highest possible perfection in it. (*A Study in Scarlet*)²³⁾

一滴の水滴から大西洋やナイアガラ瀑布の存在を推測可能だと断言するのは、彼が人生を因果の「大きい鎖」が連続したものと見ているからである。ホームズの細部への拘泥はそのような演繹的思考原理から導き出されるし、また事件解決に先立って彼が依頼人の出身地や身の上を言い当てる行動心理学的洞察もその方法原理の小手試しに他ならない。中世・ルネサンス以来の「照応理論」(correspondence)に基づいた深遠な哲学的宇宙観かと思わせる出だしで始まるホームズのこの投稿記事は、その実、きわめて実践的な記事で、以下のように続く。

... By a man’s finger-nails, by his coat-sleeve, by his boot, by his trouser-knees, by the callosities of his forefinger and thumb, by his expression, by his shirt-cuffs – by each of these things a man’s calling is plainly revealed. That all united should fail to enlighten the competent inquirer in any case is almost inconceivable. (*A Study in Scarlet*)²⁴⁾

かつての壮大な宇宙観がいかにもヴィクトリア朝人らしいこじんまりとした規模に縮小してしまっていることは否めないが、これもまた当時の合理主義的な宇宙観の反映でもあったのだろう。まだホームズの才能をよく知らないワトソンはこのファンタスティックな記事を一読して、「どうしようもないたわごと」(“What ineffable twaddle!”)といらだたしげに言うが、ホームズの超人的な謎解きを目の当たりにして、次第に彼の言説の正しさを認めざるを得なくなる。要は観察された細部が一つ一つのリンクとなり、それが互いに連結して全体として完全な因果の鎖を完成させること、それがホームズの描く推理の視覚的イメージなのである。シャーロック・ホームズの世界観はそのような合理化への信頼によって支えられ、そしてその合理化を同時代の犯罪を相手に完璧な形で実践して見せたところに彼のヒーロー性が存しているのである。

換言すれば、ホームズの世界観は合理を根本原理としてすべての現象を一望の下に閉ざしていこうとする傾向をもったものである。そのことを最もよく示すのが事件のコレクションに対するホームズの嗜好である。ホームズ物語には奇妙な蒐集癖をもつ人物がよく登場する。『バスカヴィル家の犬』では蝶の蒐集家、「三人ガリデブ」(“The Three Garridebs”)に出てくるNathan Garrideb 老人の蒐集は多岐にわたり、一見ガラクタのようなものまで集められており、その部屋はさながら「小さな博物館」といった趣きを呈している。

The room was as curious as its occupant. It looked like a small museum. It was both broad and deep, with cupboards and cabinets all round, crowded with specimens, geological and anatomical. Cases of butterflies and moths flanked each side of the entrance. A large table in the centre was littered with all sorts of debris, while the tall brass tube of a powerful microscope bristled up amongst them. As I glanced round I was surprised at the universality of the man's interests. Here was a case of ancient coins. There was a cabinet of flint instruments. Behind his central table was a large cupboard of fossil cones. Above was a line of plaster skulls with such names as 'Neanderthal', 'Heidelberg', 'Cromagnon' printed beneath them. (“The Three Garridebs”)²⁵⁾

蛾や蝶の採集から古幣、火打ち石、化石、ネアンデルタール人やクロマニヨン人の頭蓋骨の石膏までと、いかにもヴィクトリア朝的な知の百科全書を思わせる室内風景である。同様の蒐集癖は漁色家グルーナー男爵(モリアーティ教授やセバスチャン・モーラン大佐と並ぶヨーロッパ世界の危険人物)にも見られるが、彼に至っては、自分に恋をして身を滅ぼした女を、ホームズが「愛欲の日記」(“lust diary”)と呼ぶ忌まわしい日記の中に、標本として蒐集している(“The Illustrious Client”)。

実は、彼らに劣らずホームズもまた極度の蒐集癖を持つ人物なのである。もちろんホームズがコレクトしていくのは犯罪である。事件解決のたびにホームズが自分の業績を記録するワトソンに、これで君のコレクションがまた一つふえたね、と言う場面はあちこちに見られるが、その実、ホームズ自身が記録魔であり、事件のコレクションには多大の精力を注いでいるのである(“The Musgrave Ritual”)。言わば、ホームズ物語すべてが事件の標本なのであって、我々が読むのはホームズが蒐集した犯罪のコレクションなのである。

ホームズには事件を解決したあと、いつも何らかの警句を引用して事件を総括する癖がある。ジョージ・メレディスやトマス・カーライルといったイギリスの文人達だけでなく、ゲーテやペルシアの古諺、さらには推理機械のホームズには不釣り合いとしか思われたいタリアの恋愛詩人ペトラルカからの引用まである。その引用による警句癖は言ってみれば、蒐集家が手に入れた珍しいものにラベルをつける行為と等価のもので、正式にそれが自分のコレクションに仲間入りしたことを宣言する行為なのである。ホームズが新しい試薬を例証した後で未逮捕の犯罪者たちをたちどころに何人か並べ立てたことを思い出そう。それはちょうど蒐集狂の人間が手に入らない珍種をほしがるように、難しい事件を自分の犯罪コレクションの中に加えたがっていることを示す言い方なのである。そうして集めた過去の犯罪はちゃんと分類され、犯罪データベースとしてホームズの脳髓に蓄えられており、したがって事件が起こるたびに、ホームズ

がまず行うことは過去の事件との照合ということになる。

ホームズの「脳髓一小部屋」(“brain-attic”)²⁶⁾はいわば一個の犯罪図書館であり、ロンドンに限らず、全世界の犯罪が索引となってそこに収められているのである。物を集めることは支配願望の現れにほかならず、それはまさに植民地主義的エトスによる世界の蒐集と言っていいものだ。データとして集められた断片が世界を表象し、最終的に世界全体を一個の書物の中に封じ込めることになる。ホームズは「探偵学全般を一巻にまとめることに生涯を捧げる」と言うが、彼が思い描いている百科全書(“encyclopaedia”)とは円環のうちに世界を閉じ込めて支配することの謂いに他ならない。そして犯罪をデータベース化すると、犯罪を標本箱の中に封じ込めて過去のものにし、それを無害なものとして眺めるということである。つまりコレクションとは一種の異化作用であり、犯罪を遠くへ、時代的には過去へ、空間的には外部へ引き離すことで、時代の不安を悪魔祓いする行為なのである。

読者はそのようなシャーロック・ホームズの犯罪コレクションを読むことで、自分たちの住む社会が一人のヒーローによって守られていることを実感できたのである。大衆にとって殺人事件は一つのお祭り騒ぎであり、退屈な日常の気晴らしでもあった。オールティックはヴィクトリア朝の人々が殺人事件に見せる反応は「身震いというよりは甘美な戦慄であった」²⁷⁾と言う。すでにこの頃には殺人事件は日常化しており、特にセンセーショナルな事件になることは少なかった。ということは大衆が現実の殺人事件から受け取るわくわくする刺激は減少していたということである。そういう状況にあって、ホームズ物語はやはり自分たちの住む世界には不可解な事件がとりまいているのだという心地よい不安感を刺激してくれ、さらに、たとえそうであっても神の如き名探偵がそれを調伏してくれることが約束されているがゆえに安心して楽しむことができるものであった。言い換えれば、一つの祝祭としてシャーロック・ホームズ物語は大衆から受け入れられたと言っていいであろう。現実であろうとフィクションであろうと、自分に降りかからない事件であれば、犯罪は心地よい刺激として楽しめるのである。ホームズ人気はそのような大衆化の時代であればこそ、生まれたとも言えるのである。

とはいえ、ホームズが住む世紀末のロンドンには漠然とした不安の気分が霧のように瀰漫しているのもまた事実である。ホームズ作品には時折つかみどころのない不安が印象的な自然描写の形を借りて顔を出すことがある。たとえば、次の場面に見られる頼りなさはそのような不安の反映ととらえていいであろう。

It was in the latter days of September, and the equinoctial gales had set in with exceptional violence. All day the wind had screamed and the rain had beaten against the windows, so that even here in the heart of great, hand-made London we were forced to raise our minds for the instant from the routine of life, and to recognize the presence of those great elemental forces which shriek at mankind through the bars of his civilization, like untamed beasts in a cage. As evening drew in the storm grew louder and louder, and the wind cried and sobbed like a child in the chimney. (“Five Orange Pips”)²⁸⁾

9月下旬の強風に閉じ込められた「偉大な人工の都市ロンドン」(“great, hand-made London”)は、「檻の中の凶暴な獣」(“untamed beasts in a cage”)のように吠え叫ぶ自然の

猛威の前には、いかにも脆弱で、その文明の光は今にも吹き消されそうな気配である。確かにガス灯という文明の光が夜の闇を後退させはしたが、それは外側の世界の闇をあまねく照らし出すというよりもむしろ、逆に周囲の闇に押し潰されそうなものでしかなかったようだ。このどことなく頼りない気分は19世紀末の人々の無意識に巣くう気分でもあったろう。彼の理知による合理化はそうした世紀末のとらえどころのない漠然とした不安に対する「一種の解毒剤」であり、彼は「天国には神が存在し、法の内と外とをとわず彼が悪玉どもをこらしめて、この世は安泰だ、ということをも身をもって示して」²⁹⁾ くれる確実な存在だったのである。産業革命によって他国に先駆けて工業化に成功し、世界制覇を成し遂げたヴィクトリア朝の楽天主義の反映と言ってしまうまでもだが、その楽天的な合理主義によってホームズは時代の不安を解消することができたのである。彼は不可解な事件を再現することによって、その不可解性を説明可能な形に還元して白日の下にさらし、漠とした恐怖を社会から取り除くことで、社会秩序の維持に貢献する大衆の守護神であった。それはまた世紀末に忍び寄る不安を背景に神話的次元から現出した合理主義時代のヒーローであったとすることができるだろう。

<外国のトポス>

ホームズの事件簿ではイギリス国内の事件でありながら、そこに世界的規模での外国が陰に陽に関わってくる場合が多く、³⁰⁾ ヴィクトリア朝時代の植民地拡張政策に伴う意識の拡大をうかがうことができる。そして、犯罪を犯す者に特別な国境などあるはずがないのが世の道理なのだが、ホームズ・シリーズでは犯罪者は外国人かあるいは何らかの形で外国との関わりを持つ者が圧倒的に多い。ホームズ物語を読むと、悪は外国から持ち込まれるか外国で生まれるというのが一つの公式のように浮かび上がってくる。その公式は、多少の例外はあるものの、長い執筆時期にかかわらず大半の作品に当てはまる事柄である。ある意味ではシャーロック・ホームズ物語ほど大英帝国の文化的優越性を露骨に表現し、英国至上主義を強く大衆に植え付けたものはあるまい。

犯罪が生まれる国とは、言い換えれば、文化的劣等国であり、当然、外国はそのようなものとして表象されることになる。たとえば、南北戦争が終わり、農業国から工業国へ移行し始めていたアメリカは、一夫多妻制（すなわち、結婚のモラルを破壊しかねない制度）を是とするモルモン教団（*A Study in Scarlet*）、黒人撲滅を標榜する非合法殺人組織KKK（“Five Orange Pips”）、あるいは世界的互惠結社フリー・メーソンの仮面をかぶった殺人者の秘密組織 Scourer といった得体の知れない恐ろしい殺人集団（*The Valley of Fear*）がはびこる暴力的な国家として描かれ、イギリスの高い文明にはまだ遠く及ばない未開の二流国という位置づけがなされている。ことはアメリカだけに限らない。ロシアもアメリカ同様、恐怖政治の支配する危険な全体主義国家として描かれる（“The Golden Pince-nez”）。オーストラリアはイギリス国内の犯罪者を収容する流刑地として（“The ‘Gloria Scott’”）、そしてそこで財をなした新たな犯罪者を本国へ送り返す中継地として（“The Boscombe Valley Mystery”）表象されるし、インドや中南米・アフリカなど未開の国々は熱病が人をねじ曲げ、獰猛な動物が潜むさらに恐ろしい闇の領域として印象づけられる。いや、同じヨーロッパの先進国であるフランスでさえ、犯罪の摘発や解決という点ではイギリスには及ばず、フランスの探偵 Francois le Villard などはホームズの助言で事件を解決し、ホームズへの感謝と賛辞を惜しまない。それ

どころか、ホームズ自身がフランスで起きた事件を解決して「レジオン・ド・ヌール勲章」(“the Order of the Legion of Honour”)を授与されてすらいる。ドイツ人もまた密かに英国内に棲息して、偽金づくりの一味に荷担し、誘拐してきたイギリス人の親指を切り落とすという残虐な行為をなす民族として現れる(“The Engineer’s Thumb”)。ホームズの活躍と名声は短期間で全ヨーロッパに及んだことになっており、これは文明の進んだヨーロッパにあってさえ、彼が、そして彼の住む英国が、ヨーロッパ世界の正義を守る要塞になっていることを示すものである。しかし、このことはまたイギリスの文化的先進性を象徴するガス灯の光が、その周囲に黒々と広がっている深い闇に絶えず脅かされていることをも意味している。

このことを端的に示すのが『四つの署名』に出てくるアンダマン島の「黒い」異邦人に対する描写であろう。この長編はインドの財宝をめぐる事件だが、殺人現場に残された足跡や武器などの特徴からホームズは、実際に手を下した犯人は蛮人で、それもインド人ではなく南米のアンダマン島人だと推測する(このあたり、ホームズは未開民族の違いをよく知っている)。そして手元の地名辞典でその特徴を確認すると、その異邦人は短躯(平均身長4フィート以下)で、獰猛残忍で、馴致しがたく、奇形じみた外貌を呈するとされ、さらには野蛮の最も強力な記号である「食人種」(“cannibal”)の烙印も押されている。³¹⁾

They are naturally hideous, having large, misshapen heads, small fierce eyes, and distorted features. Their feet and hands, however, are remarkably small. So intractable and fierce are they, that all the efforts of the British officials have failed to win them over in any degree. They have always been a terror to shipwrecked crews, braining the survivors with their stone-headed clubs or shooting them with their poisoned arrows. These massacres are invariably concluded by a cannibal feast. (*The Sign of Four*)³²⁾

道徳的劣等性が肉体的奇形とごく当然のこのように結びついて、アンダマン島人は「生まれつき醜悪で、大きな奇形の頭部と、小さく冷酷な眼、そして歪んだ顔を有する」と規定され、この世から撲滅されるべき残虐な人種として表象される。上記の記述はホームズ自身の観察に基づく言葉ではない。ホームズが参照した当時刊行中の「地名辞典」(“gazetteer”)からの引用である。この辞典は「最も新しい権威」(“the latest authority”)と見なされる辞典であるだけに、³³⁾ この記述は絶対的な真実として読者の意識に刻印されることになる。事実、その後犯人をテムズ川に追いかける水上チェイスとなるが、そのときワトソンが垣間みる土人の姿も上記の記述と寸分違わない。

It straightened itself into a little black man — the smallest I have ever seen — with a great, misshapen head and a shock of tangled, dishevelled hair.... He was wrapped in some sort of dark ulster or blanket, which left only his face exposed, but that face was enough to give a man a sleepless night. Never have I seen so deeply marked with all bestiality and cruelty. His small eyes glowed and burned with a sombre light, and his thick lips were writhed back from his teeth, which grinned and chattered at us with half animal fury. (*The Sign of Four*)³⁴⁾

人種的偏見に歪められた公式の知識がワトソンの見た「事実」によって強められ、— 実は、このワトソンの描写も実は辞典の記述に規定されているのだが — それが読者の見方を規定することになるのは想像に難くない。

さらに問題はこの蛮人に対するホームズの扱いである。万一の危険に備えて常にピストルを用意して事件現場に出かけるワトソンとはちがって、ホームズは事件の謎を解くことで満足し、滅多に犯人を殺害することはないのだが、このときばかりはホームズ自身がこの悪の権化とも見えるアングマン島の黒人を射殺する。ドイルはその土人が猛毒の吹き矢をホームズの発砲と同時に放ったことを忘れずに書き込み、射殺の正当性を保証しているが、それ以上にこの黒人の存在規定自体がすでにホームズの行為を正当化し、英雄的行為として容認し、歓迎することを可能にしている。ここには外部世界からの悪の侵入を身を挺して守るイギリス社会の守護神としてのホームズの姿が浮かび上がるわけだが、その英雄性は帝国主義的な文化的優越性と結びついたものでもあるのだ。

外国は犯罪だけでなく、また病いと結びつけられても表象される。たとえば、異人種間の結婚を扱った「黄色い顔」(“The Yellow Face”)で、ホームズは正体不明の人物を癩病患者というイメージでとらえる。ホームズは依頼人から、近くの家に新しい住人が住み始めてから妻の素行がおかしく、夜中になるとその家に出かけ、自分に大金を無心するようになったと相談される。依頼人の妻は若いときにアメリカのアトランタ州で一度結婚するが、夫と子どもに病気で死なれ、イギリスに帰国してから依頼人と知り合い、再婚したのだという。この話を聞いてホームズは死んだはずの先夫が実は生きていて、依頼人の妻はその男から恐喝されているのだと推理し、おそらく先夫は「なにか忌まわしい病気にかかり、癩病患者かあるいは痴愚者になったのだろう」(“shall we say, that he contracted some loathsome disease and became a leper or an imbecile”)³⁹と推測する。結局ホームズの推理は間違っているのだが、忌まわしい病いと外国が容易に結びつくところにホームズ物語における外国のトポスの特質がある。

密室殺人を扱った名作「まだらの紐」(“The Speckled Band”)では、インドの熱帯性の風土がイギリス人本来のすぐれたアングロ・サクソンの特質を歪めてしまうものとして作用する(そういえば、ワトソンが負傷し、腸チフスにかかったのもインドであった)。⁴⁰ イギリスで最も古いサクソンの家系を誇る Dr Roylott はインドで暮らしている間に人間嫌いとなり、その本来の「気性の激しさ」(“violence of temper”)が顕在化して、凶暴な性格に一変してしまう。彼はインドで開業していたときにすでに怒りの発作に襲われてインド人の執事を殴り殺しており、娘の Helen はインドの気候のせいだと分析する。

But a terrible change came over our stepfather about this time. Instead of making friends and exchanging visits with our neighbours, who had at first been overjoyed to see a Roylott of Stoke Moran back in the old family seat, he shut himself up in his house, and seldom came out save to indulge in ferocious quarrels with whoever might cross his path. Violence of temper approaching to mania has been hereditary in the men of the family, and in my stepfather's case it had, I believe, been intensified by his long residence in the tropics. A series of disgraceful brawls took place, two of which ended in the police-court, until at last he became the terror of the village, and the folks

would fly at his approach, for he is a man of immense strength, and absolutely uncontrollable in his anger. (“The Speckled Band”)³⁷⁾

博士は帰英後もイギリス社会に復帰できず、周囲の者に恐れられ、階級制度から排除されたジプシーたちを唯一の友として何週間も放浪の旅に出たり、さらにはチータやヒヒや沼蛇といったインドの動物たちに囲まれた生活を好むようになる。それはあたかもイギリスの文化を喪失し、動物の次元に墜ちたかのようなのであります。ここでも博士の容貌はその性質と呼応するかのように動物じみており、火搔き棒を素手でねじ曲げるその巨体はインドが解き放った凶暴性の印として読者の目には映る。

So tall was he that his hat actually brushed the cross-bar of the doorway, and his breadth seemed to span it across from side to side. A large face, seared with a thousand wrinkles, burned yellow with the sun and marked with every evil passion, was turned from one to the other of us, while his deep-set, bile-shot eyes, and the high thin fleshless nose, gave him somewhat the resemblance to a fierce old bird of prey. (“The Speckled Band”)³⁸⁾

インドの太陽で日焼けしたその顔にはまたインドで生まれた「あらゆる邪悪な情念」(“every evil passion”)が刻み込まれている。インド産の猛毒の「沼蛇」(“swamp adder”)を使って彼は娘を殺すのだが、そうした危険な動物たちは、アンダマン島人の毒矢同様、非ヨーロッパ世界が送り込む悪の記号であり、また外の世界の低い文化を表象する記号と見ていい。そして読者の恐怖は、ロイロット博士自身よりもむしろ、これほどまでに博士からイギリス人本来のすぐれた文明性を剥ぎ採り、凶暴な人物に歪めてしまうインドの熱帯性気候に向けられることになる。³⁹⁾

外国が病いと結びつくなら、イギリスは健康を表象することになる。「ライゲイトの地主」(“The Reigate Squires”)でホームズはヨーロッパを騒がせた大詐欺師の事件を解決したものの、過度のストレスに襲われ、転地療養を余儀なくされる。ホームズの健康は病気で倒れたフランスのリヨンからベイカー・ストリートへ移り、さらにワトソンの旧友の住むサリー州のライゲイトで転地療養するにつれて回復してくる。ここではホームズがイギリスの田園によって癒されるのだが、そのホームズ自身が実はイギリス社会の健康を維持していく医者機能を担っているのである。犯罪とは、言ってみれば、社会のシステムを侵していく一種の病いであるだろう(英語の“system”という語には「制度、体制」という意味の他に「身体」という意味もある)。だとすれば、その犯罪=病いを調伏していくホームズとはまた社会体制に巣喰う病いを取り除き、浄化していく医者にはならない。

もちろん、英国文明の絶対的優越性を信じたくとも、異邦人ばかりを犯罪者に仕立てるわけにはいかない。同国人の中にも犯罪者は現実に存在したし、それどころか殺人事件などはむしろイギリスが本場とさえ言えるほど、それはもうすでに日常茶飯事になっていた。たとえば、イースト・エンド地区の娼婦たちの腹をえぐり取る猟奇殺人で世紀末ロンドンを震え上がらせた「切り裂きジャック」(Jack the Ripper)はシャーロック・ホームズの同時代人だった(ただし、こちらはホームズと違って実在の人間。ドイル自身切り裂きジャックの正体を解き明か

すよう依頼されたこともある)。その他にもイギリス犯罪史に名を残す殺人者に事欠くことはなかった。オールティックによれば、ヴィクトリア朝のジャーナリズムは刺激的な殺人事件をセンセーショナルに報道することで肥え太り、一大産業に成長したのであった。⁴⁰ そういう状況であればこそ、名探偵ホームズが登場する素地もあったと言えるのだが、しかし、ホームズが同国人の犯罪者に対して下す審判には微妙なものがある。

同胞の犯罪者に対するホームズの態度には一方でどこことなく歯切れが悪いものがある。たとえば、英国の将来を左右する英伊秘密条約文書の消失を扱った「海軍条約文書」(“The Naval Treaty”)では、ホームズはイギリス人犯人の国外逃亡をみすみす許し、イギリス国内から悪を排除できたことだけで満足している様子であるし、また犯人に殺害の意志があったのかも曖昧にされる。それというのも犯人は一応イギリス紳士であり、結局犯行は「魔がさした」ということになってしまうからである。あるいは、ホームズの記念すべき最初の事件を語る「グロリア・スコット号」(“The ‘Gloria Scott’”)では、ホームズを招いた友人の父はかつて銀行の公金を横領した罪でオーストラリアに流刑となった過去をもち、そのことを息子に隠しながら生きているのだが、最後にすべてを告白することによって過去の過ちは償われるばかりか、その告白に現れた息子に対する愛情と神の裁きに身を委ねる正直な姿がイギリス人のモラルの高さを証明することにもなっている。また、「青いガーネット」(“Blue Carbuncle”)においては犯人が改悛してみせ、ホームズはその改悛を受け入れてそれ以上追求することはない。そこにはイギリス中産階級の価値観を破壊しないような配慮がなされているように思われる。

しかし、他方、同胞の犯罪者が異邦人犯罪者以上に厳しく断罪される場合も少なくない。それはホームズが彼らを法の裁きに委ねる前に、天誅にも似た何らかの罰を受けるという形で実現することが多い。たとえば、「シルヴァー・ブレイズ」(“Silver Blaze”)は名馬の失踪とその調教師の惨殺事件を扱ったものだが、調教師の頭部をつぶした犯人は他にもないその名馬自身で、調教師が八百長目的で外科手術を行おうとした時に明かりのまぶしさにおびえ、逃れようとしてその蹄鉄が調教師の頭部を打ち砕いた結果の殺人であった。この調教師はロンドンに女をかこう二重生活を営んでおり、いわば、その罪に対する罰を受けて正義の前に倒れる形となる。⁴¹ とすれば、名馬 Silver Blazeの一撃はいわば正義の鉄槌の象徴として読むこともできる。「マスグレイブ家の儀式」(“The Musgrave Ritual”)は歴史物語とミステリーを組み合わせ、さらに暗号解読の面白さも加わった佳品だが、ここでも犯人の扱いにはやはり同様のことが見て取れる。ホームズの友人レヂナルド・マスグレイブの家に長年仕えた執事ブランドンは家に伝わる謎の文書を盗み見て解雇を言い渡され、その後メイドの女とともに失踪する。この執事は「模範的人物」(“a paragon”)と評されるほどの好男子だが、「いささか女たらしの気」(“a bit of Don Juan”)があり、そのことが仇となって最終的にメイドの女に復讐され、地下の穴蔵で死体となって発見されることになる。あるいはまた先ほどの「まだらの紐」にしても、ロイロット博士は殺人の道具として放った毒蛇に自ら噛まれて命を落とすことになるが、そこには天の配剤といった趣きがある。その死は実際にはホームズが間接的に手を貸したことになるが、彼は良心の仮借を感じないと断言し、そこには断罪のきびしさを思わせるものがある。

...Some of the blows of my cane came home, and roused its snakish temper, so that it flew upon the first person it saw. In this way I am no doubt indirectly responsible for Dr Grimesby Roylott's death, and I cannot say that it is likely to weigh very heavily

upon my conscience. (“The Speckled Band”)⁴²⁾

「グロリア・スコット号」では、友人の父の告白によって事件の全容が明らかになるが、ここではオーストラリアへ向かう囚人輸送船グロリア・スコット号上での囚人たちの反乱の様子が語られる。囚人たちの首領はイギリス名家出身のジャック・プレnderガーグストという人物で、彼に率いられた囚人たちは激しい銃撃戦の末、輸送船の奪取に成功するが、その後船は大爆発を起こして海の藻屑と消える。名家の出で、しかも才能に恵まれていながらも、悪の習慣に染まったイギリス人同胞を裁くにはこうした神罰にも似た結末しかドイルは思いつかなかったのだろう。これらはいずれも事故死という形をとってはいるが、フェア・プレイの精神を重んじたドイル流のイギリスの正義がそういう形で実現したものと考えることができる。彼は銀行強盗の仲間割れを扱った「入院患者」(“The Resident Patient”) でホームズに次のように言わせている。

Well, my dear sir, knowing the vindictive character of his old associates, he was trying to hide his own identity from everybody as long as he could. His secret was a shameful one, and he could not bring himself to divulge it. However, wretch as he was, he was still living under the shield of British law, and I have no doubt, Inspector, that you will see that, though that shield may fail to guard, the sword of justice is still there to avenge. (“The Resident Patient”)⁴³⁾

同胞が犯す犯罪に対しては、いわば身内の者であるだけに、その「正義の剣」(“the sword of justice”) はよりいっそう厳しく復讐を求めるのである。犯人が自ら死を選ぶ場合もあるが(“The Stockbroker Client”), それもドイル流の正義の現れ方の一変奏であろう。

同国人の犯罪を扱う場合に浮かび上がってくるのはイギリスという国のもつ自浄作用に対する信念である。同胞犯罪者の改悛、自殺そして事故死も結局は異邦人による犯罪の場合と同じことを含意していると言っていいであろう。すなわち、それは、優秀な文化を誇る大英帝国に悪は存在してはならない、たとえ存在した場合でも、イギリスの自浄作用が正常に機能して、決して悪が栄えることはないという、ある種の偏見を含んだイギリスの健全性と高いモラルへの信念である。そしてシャーロック・ホームズはそのようなイギリスの文化的優越性を支える道徳的審判者でもあったのである。しかし、ドイルはホームズ物語の背景になっている植民地拡張政策という、言ってみれば、国家規模での犯罪に対しては、知ってか知らずか、一言も批判的に言及することはない。ホームズは一方で、犯罪を見逃すことなく、厳しい裁きを下す審判者の役割を果たすが、他方ではイギリスの帝国主義的搾取を無言のうちに容認しているのである。それだけでなく、外国を犯罪の起源として表象することでイギリス帝国主義の内実を見えにくくする一種の隠蔽装置としても機能しているのである。

<トリックスター・ホームズ>

犯罪者の手口を全て心得ているホームズは、もし彼が犯罪を犯すとすれば、彼が捉えた犯人以上に完璧な犯罪を実行できる才能を備えている。実際、ホームズはときどきそのことを空想

してみるらしく、自分は一流の犯罪者になれたことだろうと言う。

...You know, Watson, I don't mind confessing to you that I have always had an idea that I would have made a highly efficient criminal. This is the chance of my lifetime in that direction. See here!' He took a neat little leather case out of a drawer, and opening it he exhibited a number of shining instruments. 'This is a first-class, up-to-date burgling kit, with nickel-plated jemmy, diamond-tipped glass cutter, adaptable keys, and every modern improvement which the march of civilization demands. Here, too, is my dark lantern. Everything is in order....' ("Charles Augustus Milverton")⁴⁰

これは、上流階級の婦人を恐喝する犯人の屋敷に忍び込んで、恐喝のネタである手紙をホームズ自らが盗み出そうとする場面なのだが、最新の強盗セットをワトソンに自慢げに見せて、始めて泥棒まがいのことをするときのホームズの嬉しそうな様子が眼前に浮かんでくる。探偵にあるまじき行為なのだが、彼はある種超法規的な存在なのである。単に警察という組織に属していないからではなく、ホームズの存在の本質的性格が社会的規範に縛られない類のものだからである。確かに物語の中で彼はイギリス社会の守護神としての社会的ペルソナを帯びてはいるが、本質的な存在規定においてはそうした社会性とは無縁の存在と考えたほうがホームズという祖型的な存在の本質に近いように思われる。すなわち、ホームズはたまたま「正義」（といってもヴィクトリア朝時代の限定付きの「正義」だが）の側に与しているのであって、一つ間違えば、モリアーティ教授のように「犯罪のナポレオン」（“the Napoleon of crime”）になったかもしれない探偵なのである。ホームズの関心は推理のみであって、人間的感情や倫理や道徳というものに彼は関わりをもたないばかりか、むしろそうしたものは頭脳の働きを阻害するものとして極力しりぞける。それはまた超倫理的存在としてのホームズの存在のありようを思わせる存在形式でもある。

そのように本質的に善という性格規定の希薄なホームズは神話学で言うトリックスター的な存在と見ていいだろう。ここと思えばまたあちらといった一所不在の身軽で自由ないたずら者、硬化した社会の秩序を転覆させて、風通しをよくし、そのあとで新たな活力ある秩序を呼び込む機能を果たすカンフル剤的な攪乱者。生の光ある領域にも闇の封土にも自由に行き来できる融通無碍の存在。事実、彼は犯罪解決の際にはロンドンの下部社会の協力を得ることが多い。たとえば、ホームズは情報収集のために、「ベイカー・ストリート不正規隊」（“Baker Street Irregulars”）という、ネズミのように汚く、どこへでも入り込む不良少年隊を小銭でうまく扱うのだが、そのときの彼はあたかも下層社会という裏世界の王といった趣を呈する（あるいはこの地下世界で宿敵モリアーティ教授と地上世界の覇権をめぐる争っていたのではないかと想像してみたくなる）。あるいはシンウェル・ジョンソンという人物、この男はもとは悪人であったが、今はホームズの手足として、本来の居場所である暗黒社会に侵入して情報の入手する。ホームズが自分の手足として使うのは人間だけとは限らない。彼は大都会ロンドンを中心にあって世界中の奇妙な動物を集めているいかがわしい老人と親しげにつきあっているらしく、ときおり、老人の飼っている動物を犯罪捜査に利用する。ロンドンに5つの隠れ家をもっているというホームズは地上の社会だけでなく、裏の社会にも通じ、いわば地下世界の王者と

して君臨している姿が浮かび上がってくる。すなわち、彼はどのような場所にも入っていける階級の越境者であり、光と闇の、生と死の往還者なのである。

そもそもシャーロック・ホームズの活躍するロンドン自体が昼と夜の二分割的な世界であった。人間の中に潜む獣性への恐怖を扱った同時代の怪奇小説 R. L. Stevenson の『ジキル博士とハイド氏』(*Dr Jekyll and Mr Hyde*) ではロンドンは「夜の都市」(“a nocturnal city”)⁴⁵⁾と呼ばれ、「ガス灯に照らされた広大な迷宮都市」(“wider labyrinths of lamp-lighted city”)⁴⁶⁾として表象される。その光と闇が交錯するキアロスクーロ(明暗対比)の世界で犯罪を追いかけるときのホームズは、ロンドンという迷宮世界の地獄巡りといった観を呈する。それはまた生と死の往還者トリックスターの得意とするところでもある。

ホームズの巧みな変装術も上部社会と下部社会の境界を無効にする装置であると言うことができる。その見事な変装は一番の親友であるワトソンですら見破ることができないほど巧みなもので、いわば、その人物になりきる術を会得しているのである。このこともアイデンティティという確固たる存在の社会性をもたない変幻自在のトリックスターにこそふさわしい属性と言える。

またトリックスターに幼児性はつきものだが、その点でもホームズは十分な資格を備えている。円熟した人間関係を持たず、無知と博識の極端なアンバランス、機械のごとく推理という遊びに興じるホームズの姿は、幼児の特徴以外の何者でもあるまい。一切の関係性から自由なトリックスターであるホームズは当然家族という社会的な絆とは無縁である。ホームズとの長く親密なつきあいからワトソンが抱くホームズという存在の印象もそのことを物語っている。

During my long and intimate acquaintance with Mr Sherlock Holmes I had never heard him refer to his relations, and hardly ever to his own early life. This reticence upon his part had increased the somewhat inhuman effect which he produced upon me, until sometimes I found myself regarding him as an isolated phenomenon, a brain without a heart, as efficient in human sympathy as he was pre-eminent in intelligence. His aversion to women, and his disinclination to form new friendships, were both typical of his unemotional character, but not more so than his complete suppression of every reference to his own people. I had come to believe that he was an orphan with no relatives living, ... (“The Greek Interpreter”)⁴⁷⁾

親類のことを一切語らないホームズをワトソンは孤児ではないかと推測するのだが、その推測もあながちの外れとは言えない。実際には、ホームズの祖先は「地方の地主」(“country squires”) で、自分の推理の才能はフランス人芸術家ヴェルネ (“Vernet”) の妹であった祖母から受け継いだものかも知れないと言い、さらに彼には彼以上に推理能力のあるマイクロフト・ホームズという兄がいるということもわかり、ワトソンは大変驚くのだが、それでも、ホームズの本質的な存在形式としては孤児と考えていいであろう。

さらに、ホームズの推理にしても少しも誤ることがない一方で(あるいは誤ることがない故に?)、それは一種の手品師あるいはペテン師を思わせるところがある。そしてペテンとは、これまたトリックスターの本質的属性の一つでもあるのだ。ホームズは「僕は推測はしない。それは驚くべき悪癖だ、論理的な能力を損なうものだ」(“I never guess. It is a shocking habit – destructive to the logical faculty”)⁴⁸⁾と言うが、実際には、彼の推理は厳密な意味での

deduction という純論理的なものではなく、かなりの部分が「推測」(“guesswork”、すなわち、あてずっぽう)で成り立っている。たとえば、最初の事件(『緋色の研究』)においてホームズは犯人の歩いている歩幅の短いことから犯人は感情的に激していたと「推理」するが、これなどはまさに「推測」でしかない。シービオクは「シャーロック・ホームズの謎解きが成功するのは、彼が当て推量をしないからではなく、それを実に鮮やかに成し遂げるからである。」⁴⁹⁾と言う。ホームズの推理の鮮やかさはトリックスターなればこそその鮮やかさと言うこともできるだろう。

神話的領域から現出したこのトリックスター・ホームズは、しかし、この地上に長く居座ることはできない。長居は一所不在を身上とするトリックスターの存在規定に反するからである。ドイルはホームズを神話的世界に帰すのに、もう一人神話的な次元に起源を有する人物を創りださなければならなかった。モリアーティ教授(Professor Moriarty)である。

ホームズ作品のなかでホームズに最もよく似ている人物は言うまでもなく悪の天才モリアーティ教授である。ホームズが観察した教授の外貌にはどことなくホームズを連想させるところがある。⁵⁰⁾

His appearance was quite familiar to me. He is extremely tall and thin, his forehead domes out in a white curve, and his two eyes are deeply sunken in his head. He is clean-shaven, pale, and ascetic-looking, retaining something of the professor in his features. His shoulders are rounded from much study, and his face protrudes forward, and is for ever slowly oscillating from side to side in a curiously reptilian fashion. He peered at me with great curiosity in his puckered eyes. (“The Final Problem”)⁵¹⁾

あたかも旧知の間柄のようにホームズが知っているモリアーティ教授の外見は長身瘦躯、大きな白い額は弱冠 21 歳で二項定理の論文を著すほどの卓越した知性を暗示しており、落ちくぼんだ眼、青白い顔、禁欲主義的な雰囲気、長い学究生活で丸くなった背、爬虫類を思わせるようにたえず左右に体を揺らす癖のある人物である。これとホームズの外見を比較してみよう。

His very person and appearance were such as to strike the attention of the most casual observer. In height he was rather over six feet, and so excessively lean that he seemed to be considerably taller. His eyes were sharp and piercing, save during those intervals of torpor to which I have alluded; and his thin, hawk-like nose gave his whole expression an air of alertness and decision. His chin, too, had the prominence and squareness which mark the man of determination. (*A Study in Scarlet*)⁵²⁾

モリアーティ教授と瓜二つとまではいかないが、基本的な作りはよく似ている。ホームズも教授同様 6 フィート以上の長身を誇り、しかも極度に痩せているためによけいに背が高く見え、眼光鋭く、鷹のように尖った鼻と鋭い顎、それらが敏捷で決断力の持ち主だという印象を与える。しかし外貌以上に二人に共通した特徴はその卓越した知性である。ホームズはモリアーティ教授のことを“a genius, a philosopher, an abstract thinker. He has a brain of the first order”、さらに“my intellectual equal”と呼んで、自分との知的同質性を強調する。同じ知力

を有する二人の違いはその知能の向けられる方向にある。ホームズが教授を「犯罪のナポレオン」(“the Napoleon of crime”)と呼んで恐れるのも、その犯罪に傾斜した性格、自分と同じすぐれた知力が遺伝的に悪に染まっているところにある。

But the man had hereditary tendencies of the most diabolical kind. A criminal strain ran in his blood, which, instead of being modified, was increased and rendered infinitely more dangerous by his extraordinary mental powers. (“The Final Problem”)⁵⁹

二人の違いはホームズの健康性と教授の病的な性質であると言ってもいい。知的能力において同等であるがゆえに、この二人はポジとネガのような、あるいは光と闇のような違いを印象として残すが、本質的に二人はおそらく同じ目出を有する双生児的な存在と見てよからう。

シャーロック・ホームズが神話的次元における善のヒーローであるとすれば、モリアーティ教授もまた同様に神話的な次元における悪のヒーローであろう。事実、教授自身はどのような犯罪を犯したのか具体的にははっきりしない。自らは社会の表面に出ることなく、「蜘蛛の巣の中心にじっと動かずにいる蜘蛛のように」(“like a spider in the centre of its web”)、自分の手足となって行動する犯罪者たちを操る「正体不明の悪の総元締め的な存在」(“some deep organizing power”)である。いわば、ホームズがこれまでに相手にしてきた犯人たちが集約したところに立ち現れた神話的な悪、それがモリアーティ教授なのである。したがって世の人々が、教授を直接知ることはないし、記録係のワトソンも、あるいはスコットランド・ヤードの警部たちですら教授のことは知らない。ホームズによれば長年かけて教授を追跡していたということだが、それは読者には見えない次元でなされている。とはつまり、二人の闘争は人々のあずかり知らぬ神話的な次元で絶えることなくなされてきており、二人はこの世の覇権をめぐる争う善と悪の神話的な力と考えることができる。とすれば、ホームズの善というペルソナも教授の悪というペルソナに対する相補的な関わりで一時的に付与されているものであり、いつそれが逆転してもおかしくはない性質のものである。さらに言えば、モリアーティ教授はホームズの別の顔であって、二人は、神話的次元においては同じ一つの原理の、地上における二様の現れと考えることもできよう。ホームズは、教授を倒し、その魔手から世界を解き放つことができたなら、そのとき引退しようとするのだが、それも当然のことと言える。ホームズの最終的な存在意義はモリアーティ教授の存在があって始めて成立するものだからである。言い換えれば、二人は、光と闇が補完し合うように、互いが互いを己の存在理由とする対立原理としてこの世に現れた神話的な存在だからである。したがって、ワトソンが「重い気持ち」で語る「最後の事件」で二人は組み合ったまま滝壺に落下して死亡することになるが、教授の死はまたホームズの死でもならなければならないのであったのである。

ホームズは、自らの分身とも言うべきモリアーティ教授を倒した時、同時に自らの存在理由もなくすことになる。そして二人はともに生まれでた神話的世界へと帰還し、この世では善と悪のペルソナに分裂したこの双生児はその領域で再び仲むつまじく一つに融合していったはずである。ワトソンが、滝に墜落するときの二人の様子を「互いの腕で組み合ったまま」(“locked in each other s arms”)⁶⁰と書いているように、二人は争いつつも、そうなることが宿命でもあるかのように、互いが互いを包含し合う原初の<一>となって混沌世界に帰還していったのである。そして二人が帰還していった神話的世界とは次のような世界である。

It is, indeed, a fearful place. The torrent, swollen by the melting snow, plunges into a tremendous abyss, from which the spray rolls up like the smoke from a burning house. The shaft into which the river hurls itself is an immense chasm, lined by glistening, coal-black rock, and narrowing into a creaming, boiling pit of incalculable depth, which brims over and shoots the stream onward over its jagged lip. The long sweep of green water roaring for ever down, and the thick flickering curtain of spray hissing for ever upwards, turn a man giddy with their constant whirl and clamour. We stood near the edge peering down at the gleam of the breaking water far below us against the black rocks, and listening to the half-human shout which came booming up with the spray out of the abyss. (“The Final Problem”)⁵⁶⁾

これはホームズとワトソンが眼下に眺めるスイスのライヘンバッハの滝の描写である。雪解け水でふくれあがった奔流がすさまじい勢いで流れ込み、もうもうと水煙が立ちのぼるとつもない奈落、飛沫を上げ、泡立ちかえる底なしの深淵、濡れて黒光りする岩に縁取られた巨大な裂け目、眼がくらむほど深い底の方から吹き上げてくる水しぶきと半ば人間の叫び声にも似た轟音、二人の眼下に繰り広げられるこのサブライム風景の彼方にこそホームズとモリアーティ教授が帰還していった神話的世界が広がっていると考えていいであろう。それは常人が立ち入ることを許さぬロマン主義的な原風景であり、ゴシック・ロマンス的な風景である。推理小説がゴシック・ロマンスを起源として発展してきたことは文学史上の常識だが、二人はその起源とされるゴシック・ロマンスの暗黒世界に回帰していったのである。さらにまた、この風景は人間精神の内奥の風景に転化されうる風景でもある。富山氏はこのドイルの言葉の使い方は「この情景が精神の内面のドラマとして内在化されうる可能性を示している」⁵⁶⁾と言われる。大衆文学であるホームズ物語は必ずしもこの描写に示された深淵の情景を人間精神の内面と結びつけて十分に探求することはできなかったが、ホームズが消えたあと、ここからあのフロイトや『闇の奥』(*Heart of Darkness*)のコンラッドといった20世紀の新しい闇が現れてくることになるのである。

ドイルとしては、宿敵モリアーティ教授との最終対決をひかえたホームズに、「ロンドンの空気はぼくがいたために少しはきれいになった」(“The air of London is sweeter for my presence”)⁵⁷⁾と言わせて、ホームズをモリアーティ教授とともに神話世界に戻してやるつもりであった。モリアーティ教授を倒すことでイギリス社会の安泰を永遠に保証し、それをトリックスター最後の置きみやげとして後に残し、神話的ヒーローのままでホームズに画竜点睛を上げさせるはずであった。しかし、大衆の気紛れとは手に負えないもので、ホームズ死亡に対する大衆の抗議に、やむなくドイルはホームズを復活させざるをえなくなる。復活後のホームズはもはや以前ほど神話的光輝を帯びることなく、その残光のなかで中産階級の価値観を体したイギリス紳士として矮小化していくのである。

注

- 1) たとえば、国家統一を成し遂げたばかりのドイツ帝国の脅威、宗教問題の絡んだアイルランド問題、アメリカとの交戦の可能性、各種労働組合の強硬な実力行使といった政治的社会的問題に加えて、ダー

ウィンの進化論、マルクスに端を発する社会主義思想の流行、ニーチェのニヒリズム、世紀末のデカダンス的風潮など思想的な側面でもヴィクトリア朝の楽天主義に不安な影が射し始めていた。

- 2) Ian Ousby, *Bloodhounds of Heaven: The Detective in English Fiction from Godwin to Doyle* (Harvard University Press, 1976), p. 151.
- 3) Arthur Conan Doyle, *A Study in Scarlet* (Penguin Books Ltd, 1985), p. 14.
- 4) *Ibid.*, p. 44.
- 5) Thomas A. Sebeok and Jean Umiker-Sebeok, “YOU KNOW MY METHOD”: A Juxtaposition of Charles S. Peirce and Sherlock Holmes (『シャーロック・ホームズの記号論 C. S. パースとホームズの比較研究』) 富山多佳夫訳 (岩波書店、1985)
- 6) Arthur Conan Doyle, “The Greek Interpreter”, *The Memoirs of Sherlock Holmes* (Penguin Books Ltd, 1950), p. 182.
- 7) Arthur Conan Doyle, “A Case of Identity”, *The Adventures of Sherlock Holmes* (Penguin Books Ltd, 1981), p. 33.
- 8) シャーロック・ホームズは超人的な明知の持ち主で、時には事件解決に向けて一日中部屋でタバコをくゆらせて苦行僧のように思考に没頭するが、ひとたび事件が解決するとひどい倦怠に襲われ、人生が耐え難く思われてくる。その倦怠ゆえに、一日に3回コカインの皮下注射をするのだが、ワトソンがそれを見て、つい堪えきれずその悪癖を忠告すると次のように答える。

‘My mind,’ he said, ‘rebels at stagnation. Give me problems, give me work, give me the most abstruse cryptogram, or the most intricate analysis, and I am in my own proper atmosphere. I can dispense then with artificial stimulants. But I abhor the dull routine of existence. I crave for mental exaltation. That is why I have chosen my own particular profession, or rather created it, for I am the only one in the world.’ (*The Sing of Four*, p.8)

ホームズにとって事件のない日常は退屈きわまりないので、世紀末の憂鬱症はロンドンの霧のようにベイカー街に浸透し、彼の脳髓をも侵しているのである。ホームズの倦怠はデュパンから受け継いだものであるが、ドイルとポーがその文学的資質において異なっていたように、ホームズとデュパンはいつしか袂を分かつことになる。デュパンが素人探偵として二、三の難事件を解決した後、大きな文学的遺産を残して大衆と縁を切り、夜の闇に消えていったのに対し、ホームズはジェントルマン・ヒーローとして大衆のいる昼の世界で生き続けることになる。さらに、ホームズの憂鬱は必ずしも真性のもではなく、世紀末の一種のポーズであったと思われる節もある。「生の倦怠 (tedium vitae) を病む」というのは、一般大衆とは異なる種族であるということアピールする世紀末の一つの流行でもあったからだ。あの中産階級の良識を体現したワトソンですら、『緋色の研究』では、憂鬱症とまではいかないにしても、人生の単調さをかこつのである。もっとも彼の場合は結婚によって家庭の幸福を知り、典型的な安定した中産階級の価値観の中で落ち着くことになるのだが。

- 9) Ousby, *Bloodhounds of Heaven*, p. 1. OED は “detect” の語源を <L *detegere* = to uncover, discover としているが、さらに詳しくみると、“de” (=off) + “tegere” (= to cover) となり、“tegere” の名詞形 “tegimen (tegumen) / tegimentum (tegmentum)” は「覆い」「包皮」「表皮」「屋根」の意で、さらに派生語の “tegula” は「(屋根) 瓦」「かわら屋根」を意味する。なお、英語の “thatch” (屋根を葺く) もこのラテン語から出ているという。小池滋「アホリズム・カレンダー 7月」(研究社『英語青年』1998年、7月号) 参照。
- 10) ホームズにとってロンドンはさまざまな顔を持ち、その一つが「劇場 (として) のロンドン」 (“theatrical London”) である。以下の引用文参照。

In rapid succession we passed through the fringe of fashionable London, hotel London, theatrical London, literary London, commercial London, and, finally, maritime London, till we came to a riverside city of a hundred thousand souls, where the tenement houses swelter and reek with the outcasts of Europe. (“Six Napoleons”, *The Return*, p. 191)

- 11) Doyle, “Silver Blaze”, *The Memoirs*, p. 7.

- 12) Doyle, "The Yellow Face", *The Memoirs*, p. 35.
- 13) Arthur Conan Doyle, "Six Napoleons", *The Return of Sherlock Holmes* (Penguin Books Ltd, 1981), p. 200.
- 14) ホームズの化学実験に熱中する様子にはどことなくオナニズム的なエロティシズムが感じられる。かつて中世からルネサンスにかけて黄金変成の夢に憑かれた錬金術師たちはフラスコ内で起こる化学反応の過程を受精—妊娠—出産といった一連の生殖行為の比喩で語った。化学反応とは本来性的ニュアンスを含んだイメージなのである。作品中で数回結婚するワトソンとは違って、女性に一切関心を示さず、精密な機械のように推理していくホームズの抑圧された性をこのあたりに読み取ることはおそらく不可能ではないだろう。シャーロック・ホームズにとっては化学実験も推理行為もともに独身者の性具のようなものではなかったろうか。
- 15) Ousby, *Bloodhounds of Heaven*, p. 154.
- 16) 因みに探偵小説の創始者とされる Poe は "ratiocination" という語を使っている。
- 17) たとえば、「ライゲイトの地主」("The Reigate Squires") という短編において、ホームズが指摘した犯人父子を警部が信じようとしないうち、ホームズは「二人の顔を見ればいい!」と言い、何よりも顔の表情にこそ罪の強力な証拠が読みとれることに注意を促す。
- 'Arrest these men, Inspector!' he [Sherlock Holmes] gasped.
- 'On what charge?'
- 'That of murdering their coachman, William Kirwan!'
- The Inspector stared about him in bewilderment. 'Oh, come now, Mr Holmes,' said he at last; 'I am sure you don't mean really to —'
- 'Tut, man; *look at their faces!*' cried Holmes curtly.
- Never, certainly, have I seen a plainer confession of guilt upon human countenances.* The older man seemed numbed and dazed, with a heavy, sullen expression upon his strongly-marked face. The son, on the other hand, had dropped all that jaunty, dashing style which had characterized him, and *the ferocity of a dangerous wild beast gleamed in his dark eyes and distorted his handsome features.* The Inspector said nothing, but, stepping to the door, he blew his whistle. Two of his constables came at the call.
- (*"The Reigate Squires"*, *The Memoirs*, pp. 130–1. イタリックは筆者)
- 一般にホームズ作品においては、登場人物の外見描写は当時流行していた観相術 (physiognomy) や骨相学 (phrenology) に基づいてなされているように思われる。犯罪者には美の基準からはずれた容貌が与えられ、上流貴族にはその地位に応じた特質が外見にも与えられる。つまり、ドイルにあっては、外に現れた特徴 (appearance) が内なる本質 (reality) を裏切ることは基本的にないのである。そうしたわかりやすさがホームズ物語の人気の原因の一つでもあったろう。
- 18) Ousby, *Bloodhounds of Heaven*, p. 153.
- 19) このあたりメタフィクショナルな構造になっている。すなわち、ホームズ・シリーズにはホームズやワトソンが自分たちの登場する物語に自己言及していく構造が見られる。ただし、作者ドイルにはそうしたポストモダンな小説作法に対する先鋭的な意識はほとんど見られない。むしろドイルのこの書き方は19世紀の「伝記」文学の流行の反映と見る方が正しいだろう。ワトソンは自分を、ジョンソン博士に対するボズウェルのような、ホームズの「伝記作家」(biographer / chronicler) と自認しており、また、「冒険」(*The Adventures*) や「回想録」(*The Memoirs*) といった短編集のタイトルは当時多く出回った伝記を思わせる付け方である。
- 20) Doyle, "The Red-Headed League", *The Adventures*, p. 74.
- 21) Doyle, "Silver Blaze", *The Memoirs*, p. 31.
- 22) Doyle, "The Empty House", *The Return*, p. 7.
- 23) Doyle, *A Study in Scarlet*, p. 22.
- 24) *Ibid.*, p. 23.

25) Arthur Conan Doyle, "The Three Garridebs" *The Case-Book of Sherlock Holmes*, (Penguin Books Ltd, 1951), pp. 122-3.

26) Doyle, *A Study in Scarlet*, p. 19.

27) Richard. D. Altick, *Victorian Studies in Scarlet* (『ヴィクトリア朝の緋色の研究』) 村田靖子訳 (国書刊行会、1988) p. 15. さらにオールティックは「殺人が大衆娯楽、つまり見るスポーツとして制度化されたのはヴィクトリア朝初期、もしくはその直前のことだった」と言い、「ヴィクトリア朝の人びとは、何世代にもわたって、一見然るべき恐怖感をもって薄気味悪い事件を見ている風だが、よくよく調べてみると、何やらお祭り気分のようなもので接しているのがわかる。」とも言う (同書、p. 14)。

28) Doyle, "Five Orange Pips", *The Adventures*, p. 101. なお、同質の表現は次の箇所にも見られる。

It was a wild, tempestuous night towards the close of November. Holmes and I sat together in silence all the evening, he engaged with a powerful lens deciphering the remains of the original inscription upon a palimpsest, I deep in a recent treatise upon surgery. Outside the wind howled down Baker Street, while the rain beat fiercely against the windows. It was strange there in the very depths of the town, with ten miles of man's handiwork on every side of us, to feel the iron grip of Nature, and to be conscious that to the huge elemental forces all London was no more than the molehills that dot the fields. I walked to the window and looked out on the deserted street. The occasional lamps gleamed on the expanse of muddy road and shining pavement. ("The Golden Pince-nez", *The Return*, pp. 223-4)

29) Ronald Pearsall, *Conan Doyle: A Biographical Solution* (『シャーロック・ホームズの生まれた家』) 小林司・島弘之訳 (新潮社、1983)、p. 93.

30) 極東のわが日本も言及される。ホームズはイギリス伝統の国技であるボクシングの名手であるが、日本の「バリツ」("baritsu") もいささか心得ている ("The Empty House")。「バリツ」とは "the Japanese system of wrestling" とあるだけで、どういふものか今一つはっきりしないが、武術の一つらしい。してみるとドイルは日本を武道の国としてとらえていたのであろうか。

31) 「食人」(cannibalism) の記号論については下記の書物から多くを教えられた。

正木恒夫『植民地幻想 — イギリス文学と非ヨーロッパ』(みすず書房、1995)

32) Doyle, *The Sign of Four*, p. 81.

33) 正木恒夫氏は、ホームズが参照した「地名辞典」("gazetter") はドイルの創作である可能性が強く、その際、当時の百科事典ブリタニカ第9版を根拠にした可能性も否定できないとされる。しかし、実は、ブリタニカ第9版ではアンダマン島人の「醜貌」については否定され、「食人」についても謬説として退けられているのである。氏は、この『四つの署名』は「醜いアンダマン島人」というそれまでのステレオタイプが「人類学的な細部へのまなざし」によって崩れていくその最中であって、「その崩れゆくステレオタイプを堅持しようとする」物語だとされる。(「シャーロック・ホームズの光と闇」『植民地幻想 — イギリス文学と非ヨーロッパ』p. 225)

34) Doyle, *The Sign of Four*, pp. 101-2.

35) Doyle, "The Yellow Face", *The Memoirs*, p. 49.

36) インドと病いを結びつける同様の思考は児童文学にまで及んでいる。たとえば、Burnett 夫人の『秘密の花園』(*The Secret Garden*) で描かれるインドはコレラと戦争のはびこる世界で、主人公の少女 Mary はそこで健康を害するだけでなく性格もねじ曲げられ、"contrary" (つむじ曲がり・ひねくれ者) と周りの者からからかわれ、嫌われ者となる。やがてイギリスに住む親類の許に引き取られ、ヨークシャー地方で暮らすようになってから、彼女は次第に「いい子」に癒されていくが、作者はそれをその地方 ("the moor") の気候の力とする。

There is no doubt that the fresh, strong, pure air from the moor had a great deal to do with it. Just as it had given her an appetite, and fighting with the wind had stirred her blood, so the same things had stirred in her mind. In India she [i. e. Mary] had always been too hot

and languid and weak to care much about anything, but in this place she was beginning to care and to want to do new things. Already she felt less 'contrary', though she did not know why. (*The Secret Garden*, pp. 77-8 [Everyman's Library])

インドや中南米を病いと結びつけ、英国を健康と結びつけるこうした表象の暴力はヴィクトリア朝文学に多かれ少なかれ共通する事柄である。

- 37) Doyle, "The Speckled Band", *The Adventures*, p. 169.
- 38) *Ibid.*, p. 176.
- 39) ホームズ・シリーズにおいて外国は犯罪の供給源としてだけ表象されるのではない。そこはまた富を産出する源としても表象される。たとえば、『四つの署名』はインドに眠る「アグラの大宝物」("The great Agra treasure")をめぐる事件であり、流刑地としてのオーストラリアはまた鉱山開発によって財産を築いていく場でもある("The Boscombe Valley Mystery")。「グロリア・スコット号」で、ホームズの友人の父は囚人輸送船爆発後、オーストラリア行きの帆船に救助され、そこで一旗揚げ、「金持ちの植民地開拓者」("rich colonials")となって帰英する。ホームズ物語において外国は犯罪と財宝—恐怖と魅惑—の入り交じる空間として大衆読者のロマンティシズムをくすぐったのである。大衆ロマンティシズムと外国表象に関してはいずれ稿を改めて論じたい。
- 40) R. D. オールティックは次のように言う。
「比喩的にいえば、十九世紀の印刷屋のインクには重要な成分として血がまじっていたのである。現実には頻繁に起きた殺人事件は新聞を繁栄へとみちびき、イギリスのジャーナリズムを一大産業へと変貌させるのに手を貸した。」(Altick, 『ヴィクトリア朝の緋色の研究』、p. 96)
- 41) ドイルは性道徳にはきわめて厳格なところがあり、ホームズ物語において女性を食物にする犯罪に対しては厳しく断罪する。ドイルの騎士道的精神の投影と見ることもできよう。もし、家庭というものがヴィクトリア朝社会の基盤であるとすれば、性道徳の破壊は社会の基盤そのものを破壊しかねない反社会的行為となる。イギリス社会の守護神であるホームズにとってそれは許しがたい行為なのである。
- 42) Doyle, "The Speckled Band", *The Adventures*, p. 190.
- 43) Doyle, "The Resident Patient", *The Memoirs*, p. 178.
- 44) Doyle, "Charles Augustus Milverton", *The Return*, p. 170.
- 45) R. L. Stevenson, *Dr Jekyll and Mr Hyde and Other Stories* (Penguin Books Ltd, 1951), p. 37.
- 46) *Ibid.*, p. 37.
- 47) Doyle, "The Greek Interpreter", *The Memoirs*, p. 179.
- 48) Doyle, *The Sign of Four*, p. 14.
- 49) Thomas A. Sebeok and Jean Umiker-Sebeok, 『シャーロック・ホームズの記号論 C. S. パースとホームズの比較研究』、p. 28.
- 50) モリアーティ教授を唐突に登場させたのには作者ドイルの側の事情もあった。歴史小説にこそ自分の真の才能はあると信じ、余技で始めたシャーロック・ホームズ物で作家として名声を得ることに不満であったドイルは早くホームズから自由になりたかった。そのためにはホームズと対峙しうるだけの犯罪者を創造することが必要であったのである。
- 51) Doyle, "The Final Problem", *The Memoirs*, p. 241.
- 52) Doyle, *A Study in Scarlet*, p. 18.
- 53) Doyle, "The Final Problem", *The Memoirs*, p. 239.
- 54) *Ibid.*, p. 251.
- 55) *Ibid.*, p. 250.
- 56) 富山多佳夫『空から女が降ってくる — スポーツ文化の誕生 — 』(岩波書店、1994)、p. 62.
- 57) Doyle, "The Final Problem", *The Memoirs*, p. 255.